

「伝えたい」思いと
「伝えられない」もどかしさ

上坂元 絵里

新しい出会い

三歳児との出合いを控え、名簿を手書きしながら名前を一生懸命覚える。以前はもつと染み込むように覚えられたのにと思いながら。女兒十人、「子」のつく名前が一人もないことにも時代の変化を実感する。また、今年度は早生まれの子どもが少な

い。身体の大きいしっかりとした人が多いのかしらなどと、あれこれ想像してみる。

入園式当日、文字とイメーজだけの名前が、実際の姿を伴った〇〇さんへ変わる。保育室の入り口での出会い、靴には名字しか見えない。必死で思い出して△△くんと、声をかける。途端に、保護者からもほっとした思いが伝わってくる。

生活が始まってみると

予想に違わず、三年保育にしては落ち着いた新年度のスタートであった。朝の登園、あいさつをして、うがい・手洗いをするという生活の流れを受け入れ、ブロック・積み木・絵本といった遊具に興味を惹かれて、保育室の中ですごす。そのうち園庭へ出ることを覚え、気がつくど保育室には誰もいなくなるほど、お庭も大好きな子どもたちであった。とはいえ、一見落ち着いたようにみえる新学期の毎日、少しずつ一人ひとりの個性が目についてくる。

A児の「泣き声」

A児は「せんせい、おはようございます」ときちんとあいさつして登園。五月のある日、降園前のひととき、絵本を見終わり「次にするのは何かし

ら？」とみんなに尋ねると、A児は率先して「おトイレに行きます」と答える。生活の流れを理解し、ことばにできるしつかり者の面が見られた。一方で、A児は一日の生活の中で何度も泣く。天井を仰いで、からだ中で不満を表すという泣き方をする。例えばS達が井形ブロックをつなげて床に並べて遊んでいるといった場面。

A児は何も言わずブロックを取る。A「だめ！」取られたSはそれを取り返そうとする。(A児、泣き出す)

保育者「あなたも使いたかったの？ これはSちゃんが作ったの。Sちゃんが作っているのを取ろうとしたからね」(A児は泣き続ける)

保育者「Aちゃん、泣いているけど、Sちゃんも悲しいのよ。壊れちゃって」

A児は泣き続け、部屋中にAの泣き声が響く。保育者は他の子どもの要求にも対応しなければなら

ず、A児はさらに大きな声で泣いている。周りには子どもたちが寄ってくる。ちょうど居合わせた年長児が、「ハイ」と緑のブロックをA児に渡し、頭をなでて慰めている。三歳児のB児もA児の頭をなでる。渡してもらったブロックに興味が出てきたのかA児は泣きやむ。

自分がやりたい面白そうと思ったことにはほとんど手を出し、ものへの興味が旺盛なA児、しかし、相手の思いや状況への気づきは幼い。A児を見てみると、生活の中で定番的に使うことば・耳から入って覚えていることばと、自分の思いを伝えることばの育ちはイコールではないということを確認させられた。ここでは保育者は、相手の気持ちや状況を説明するにとどまっているが、度々起こる同様の場面、自分の気持ちをことばで伝えられるよう、代わりにことばで表現してみたり、繰り返し働きかけている。

お友だちと一緒に座れない、並べない

入園式の日、S児は遊戯室に入るまでは落ち着いていたものの、記念写真を撮る際には嫌がり、取り押さえる保育者に対して「せんせい、きらい」と反発、初日からあまりいい関係になれなかったと、先へ向けての課題を感じてのスタートであった。翌日から、おはようのあいさつこそ口に出してはしないものの、すんなりと母親とは別れ、ブロックなどに興味をもって遊び始める。数日後には、お庭で出会った年中さんと一緒にすごし、保育者の手を煩わせることもなく楽しくすごす。

しかし、問題は降園の時間であった。あつまりの時間に他の子どもが座っている輪の中に、自分も身を置くことがどうしてもできない。落ち着きがないというより、分かっているがしたくないという印象であった。最初のうちは、ままごとコーナーに座っ

ていても、まあそこで参加しているということだ……と大目に見ていたが、保育者としても、毎日続くくと、そろそろこれくらいは受け入れて欲しいと思うようになる。

椅子に座らせようとすると、完全に脱力してガランとなつてしまう。保育者の動きを見ながら嬉しそうに逃げ回る。持たせたカバンはボンと投げ捨てる。一旦列についても、やはり保育室から出ずに残ってしまう。さまざまなかだの表現で、降園時の生活の流れに添うことを拒否し続ける。

玄関で待つ母親の身になると「遊んでいるときはとても楽しそうなんです、お帰りになると……」とフォローにならない言い訳を試みたりする。しかし、どうしてお帰りになると、S児はこんなに保育者の気を惹こうとするのだろうか？ と再度考えてみたとき、保育中のS児は、こちらが想像する以上に背伸びをして頑張っていたのかと推測された。六

月に入ると、S児がちよつとしたことで「せんせい。せんせい」と呼んでくるが多くなる。少しずつ保育者を頼りにすることができるようになっているのかと感じたが、S児は結局、一学期の終わりでますんなりとは帰ることができなかった。他の子どもを保護者にお渡しして急いで戻ると「せんせい、きらい。おかあさん、きらい」と突っぱねられる。ただ帰りたくないというだけではない、何かうまく表現できない思いを感じながら、どうすればもつと素直に思いが表現できるのかと考え続けた一学期であつた。

先生に言えない

K児は入園当初、緊張をからだ中に漂わせながらも、母親と別れるときに泣いたり、保育者に甘えてきたりすることは殆どなく、四月のうちに一緒に過ごす三人組ができた。保育室からは少し遠いブラン

コに、子どもたちだけで乗りに行くなど、自分たちで生活を始めたという印象であった。三人の中でO児は、お庭で遊ぶのが大好き。でも、K児はもう少し室内でままごとなどもしたいのでは？と感じて、「Kちゃん、お庭行きたいの？ お部屋でおままごとでもできるのよ？」と尋ねてみる。K「本当は、疲れちゃったから……。」と、お部屋で遊びたいとストレートには言えない。

五月のある日、お山でK児を見かける。しょんぼりと一人でしたので、何かあったのかなと思いつくと、さっと逃げる。やつぱりと思いつくやかに聞き出そうとするが、最後まで何があったのか言えない。

思いを「伝えることば」を育むために

三つのお弁当箱に「ちそうをつめていたA児、Y児が「僕のお弁当箱がない」と保育者に訴えかける。

「ひとつ貸してって言ったら？」と保育者は答える。

そのことばを聞いたか聞かずにか、Y児はA児の手元のお弁当箱を三つとも持っていたこうとする。A児は、

泣きながら「Aちゃんのがなくなっちゃう！」と叫ぶ。保育者は「Aちゃん、よく（ことばにして）言えたね」とA児の小さな変化を嬉しく思いながら声をかける。そんな風に、今まではほんの少し、でも確かに違うことばを、子どもたちが使うことができた瞬間を受け止め、認めていくことも保育者の大切な役割のひとつかと思う。

五月、二回目のお誕生会、おやつを食べる席になかなかつくことができないS児。実習生が「ちゃんと座らないとおやつ食べられないよ」と困りながら発したひとこと。結局、S児は椅子には座ったが、



ひと口もおやつを口にしなかった。大人は物の例えで言ったつもりのことばでも、子どもは本当に真に受け止める。迂闊に物は言えないと改めて感じさせられた出来事であった。

まだわずか四年の人生しか生きていない子どもたち、テレビその他の身近な環境から取り込んだ一見豊かな言語能力に、ふと大人と会話しているような錯覚に陥ることもしばしばである。幼稚園の生活が始まり、子どもたちは、友だちや保育者と出会い、さまざまなことを感じ、「伝えたい」思いをたくさんもつ。けれども、なかなか「伝えられない」もどかしさを感じ、葛藤していることが、さまざまな場面で伝わってくる。今までと違って、すぐに助け船を出してくれる親もそばにはいない。三歳児の子どもたちを見てみると、「伝えたい」「うまく伝えられない」という悶々とした思いをもつことの大切さをひしひしと感じさせられる。そして、友だちや保育

者との関わりの一つひとつを通して、生きた伝えることばを豊かにしていられるようにと強く思う。

S児がすんなりとお帰りに座れたある日、保育者が「きょうは、みんなお支度がすつとできました」と声をかけると、E児「Sくん、かつこいい！」と言う。いつも座れないSに対するE児なりの精一杯の表現だったと思う。

教師という立場に身を置いていると、なにか教師臭い、あるいは教師らしい物の言い方が染みついてしまうのを感じる。それだけに、子どもたちの必死の思いで表現することばに、はつとさせられることも多い。私自身、思いを伝える「ことば」で語りかけられる者でありたいと改めて思う。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)